ON THE RUN: FUGITIVE LIFE IN AN AMERICAN CITY

“新しいジム・クロウ”を生きる——『逃亡者の社会学』

7年前に出たこの本の原書は、学術書としては異例のベストセラーになり、いくつもの国で翻訳された。刊行と同じころに、ミズーリ州ファーガスンで18歳の黒人青年が職務質問中の警官に射殺される「マイケル・ブラウン事件」が起こり、black lives matter運動に発展する抗議の動きが始まった。そうした流れの中で、著者のアリス・ゴッフマンは、自分が観察した事実を例として掲げながら、都市の黒人地区の若者たちに警官と刑務所で強圧的に対処するのではなく、かれらに未来を与える方向で、厳罰化一辺倒の不公正な刑事司法制度を改革すべきだと積極的に訴えた（そうしたスピーチのいくつかはYouTubeで観られる）。その結果、彼女は保守派の標的になり、学問と倫理の二つの面で攻撃され（受け狙いでデータをでっち上げたんじゃないのとか、本の記述からして彼女は犯罪の共犯者だとか）、つけるはずだった大学のポストにつけなくなったりもした。

改めて分厚い邦訳を読み直して、本書は信頼できる優れたフィールド研究だという感を強めた（彼女はインフォーマントを司直の手から守るため調査記録を処分したので、でっち上げといわれても反証を示せなかったのだが）。ユダヤ系の学者夫妻の娘として育った著者は、大学2年のとき、ふとしたことからフィラデルフィアの貧しい黒人居住区に住む姉妹の家庭教師になった。そこからつてをたどり、本では「6番ストリートボーイズ」と呼ばれる若者グループ（ストリート・ギャング）の「身内」になって、6年に及ぶ肌の色と性別を越えた密度の高い参与観察をした。その成果である本書は、そうした言い方をするなら、イナーシティで生まれたヒップホップの背後にあるリアルの描写だともいえる。

原題の『On the Run』は、逃走中という意味だ。著者は、警察がまるで占領軍の治安部隊のように強権的な監視や捜査をし、そのため、多くの若い黒人男性が逮捕や服役を経験して、司法から「逃げる」ことが地域の暮らしの基調になっていると指摘する。だから、子どもの遊びのドロケイ（泥棒と警官）でさえ、悪役の警官の乱暴な逮捕をどう免れるかという設定に変わってしまっているというのだ。貧困と高失業率の中で、少なからぬティーンエイジャーが生活のためにドラッグ（とりわけクラック）の売買をはじめとする非合法活動に手を染める。そうでなくても、学校でのけんかや教師との衝突、マリファナ所持程度の些事も、逮捕や収監や保護観察処分のもとになりうる。裁判にかけられれば訴訟費用を払わされ（!）、それを払えないとその金額分刑務所で働かされる。地域の警官には逮捕者数の裏ノルマがあり、また逮捕時にはできるだけ被疑者を痛めつけるべしという暗黙の規範がある。こうした“新しいジム・クロウ”と呼ばれる体制の中で、トラブルを抱えた若者がどんなテクを使って「逃走」し、警察はどんなやり方でかれらを追いつめるか。やられっぱなしではいないかれらとその家族はどんなふうにしたたかに刑事司法システムを利用し、しかし結局はどれだけ大きな犠牲を払わされているか。そうした「世界一の刑務所国家」アメリカの酷薄な現実のひとつの断面を描く証言としても、本書には大きな値打ちがあると思う。（中河伸俊）

逃亡者の社会学
アメリカの都市に生きる黒人たち

アリス・ゴッフマン著
二文字屋脩・岸下卓史 訳
（亜紀書房／定価2,970円）
ISBN978-4-7505-1638-7
http://www.akishobo.com

目次

第一章　六番ストリートの少年たちと彼らの法律上の問題
第二章　逃走術
第三章　警察がドアをガンガン叩くとき
第四章　法律上の問題を個人的に使える手立てに変える
第五章　犯罪者となった若者たちの社会生活
第六章　保護と特典の市場
第七章　クリーンな人々
結　論　逃亡者のコミュニティ

FROM ABROAD

海外ニュース——フリーマーケッ

●**レオ・ノセンテリ**の未発表ソロ・アルバム『And Side』が11月19日、米国にてリリースとなる。は、1970年から72年の間にニューオーリンズジモ・マタッサのジャズ・シティ・スタジオでレコーングされたもので、ミーターズのジョージ・ポータJr. (b)、ジガブー・モデリスト(ds)、アラン・トゥー(p)、ジェイムズ・ブラック(ds)が参加。タイトルす通り、ザ・ミーターズのファンキーなギタリストて活躍していたノセンテリの別のソフトな一面をた内容となっている。

この作品が今回リリースに漕ぎつけた経緯が深い。何とそのマスターテープはカリフォルニアリーマーケットで売られていたというのだ。レコーング後、ノセンテリはマスターテープをシーセインスタジオに託したというが、ミーターズが人気を中でそのリリースは後回しとなった。後にテープ庫に移されたものの、そこの貯蔵品が差し押さ対象となり、ブラインド・オークションを通じて遠れた土地のマーケットに出品されたのだった。

2018年、レコード・コレクターのマイク・ニシマーケットでシーセイントのロゴが入ったテープを発見。貴重なものと見込んでそれを購入したが、今回のリリースにつながっている。シーセインスタジオに保管されていたマスターテープの多2005年のハリケーン・カトリーナで失われている考えれば、今回50年もの歳月を経て、この作がリリースされることは奇跡と言えるのではないうか。このリリースについてノセンテリ本人は、「素らしい発見だ。これは永遠に失われたと思って私の人生の一部なのだ」とコメントしている。

＜訃報＞

●**ドクター・ロニー・スミス**（2021年9月28日、リダ州フォートローダーデールの自宅にて死去。歳。肺線維症）ハモンド・オルガン奏者。1960年よりジョージ・ベンソンのバンドに参加するなど躍。日本でも人気を博しており、度々来日していた

●**ピー・ウィー・エリス**（2021年9月23日死80歳。心臓の合併症）サクソフォン奏者。196代にジェイムズ・ブラウンのバンドで活躍した で知られる。その後はヴァン・モリスンとも長きり活動を共にした。

●**メルヴィン・ヴァン・ピープルズ**（2021年9月